香川大学生涯学習教育研究センター
30周年記念講演会＆シンポジウム

知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み
～生涯学習を通した社会貢献～

2008年９月25日（木）　13：30～16：00
高松市生涯学習センターまなびCAN

後援：香川県教育委員会、高松市教育委員会

13：30～14：50　　第一部　講演会
シェイクスピアとともに歩む～公開講座を振り返って～
稲富健一郎　　香川大学名誉教授
公開講座の源流を探る
山本　珠美　　香川大学生涯学習教育研究センター准教授

15：00～16：00　　第二部　シンポジウム
コーディネーター　清國　祐二　　香川大学生涯学習教育研究センター長
シンポジスト　浅野　秀重　　金沢大学地域連携推進センター教授
稲富健一郎　　香川大学名誉教授
阿部　文雄　　香川大学教育・学生支援機構長

開会挨拶

司会：清國祐二（香川大学生涯学習教育研究センター長）

それでは定刻になりましたので始めさせていただこうと思います。本日は「香川大学30周年記念講演会＆シンポジウム　知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み～生涯学習を通した社会貢献～」にお集まりくださいましてどうもありがとうございました。

私は本日の司会進行を務めさせていただきます香川大学生涯学習教育研究センターのセンター長で清國と申します。こんな顔をしておりますが、ちょっと目を病んでしまっています。大変お見苦しいとは思いますが、本日午後お付き合いのほどよろしくお願いいたします。

シンポジウムの開会に先立ちまして皆様方にお願いがございます。携帯電話等をお持ちの方がいらっしゃると思いますが、マナーモードもしくはお切りいただくように、どうぞよろしくお願いいたします。

本日の資料は皆様方のお手元にございますでしょうか。こちらの資料の中にアンケートが入っております。お帰りの際に受付でご提出いただければ幸いでございます。

では、開会に入らせていただきます。まず主催者を代表いたしまして、香川大学教育・学生支援機構の機構長、阿部文雄より一言ご挨拶申し上げます。

阿部文雄（香川大学教育・学生支援機構長）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました香川大学教育担当副学長を務めております阿部と申します。香川大学生涯学習教育研究センター30周年記念講演会＆シンポジウムの開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。なお本来ならば本学の一井学長がご挨拶申し上げるべきところでございますが、あいにくと所用のため出席できなくなりまして、私が代わりを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

さて、本日は金沢大学地域連携推進センター教授の浅野秀重先生、香川大学名誉教授の稲富健一郎先生をお迎えして、香川大学生涯学習教育研究センターの30周年記念講演会＆シンポジウムを開催する運びとなりました。多数の皆さんのご参加をいただきまして大変ありがとうございます。

ご承知のように本学生涯学習教育研究センターは、昭和53年４月に全国３番目の大学教育開放センターとして設置されまして、平成３年には生涯学習教育研究センターへと発展的に改組され、今年で30周年を迎えることができました。その間、当センターは香川県教育委員会をはじめ多くの方々のご協力を得て着実に成果を蓄積し、発展を遂げてまいりました。公開講座や社会教育主事講習など、地域の社会人等を対象に生涯学習の場を提供し、また生涯学習に関する研究を重ねてまいりました。この30年を一つの区切りとして、今後ともさらなる発展を期しているところでございます。

ところで、生涯学習は近年国民の関心が大いに高まり、大変注目されるようになっておりますとともに、大きな、そして重要な動きがあります。第１に平成17年の中教審の答申、我が国の高等教育の将来像では、大学の機能として挙げられた７つの機能のうちの６番目に、地域の生涯学習機会の拠点として明確に位置付けられました。

２番目としまして、平成18年には教育基本法が改正され、その中で初めて大学の社会貢献が明確にうたわれることになりました。生涯学習の理念がその第３条で新設されました。第３条では、国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなけ

ればならないと述べられております。

第３に、昨年平成19年12月ですけれども、学校教育法の改正におきまして、大学が社会人等を対象とした課程（教育プログラム）を修了した場合に証明書を交付することができるという「履修証明制度」が導入されました。今後この制度の活用が重要な課題となっていると思っております。

第４に、これは本年２月になりますけれども、「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」と題する中教審の答申が出されましたが、そこで目指すべき施策の方向性を国民一人一人の生涯を通じた学習の支援と社会全体の教育力の向上に集約し、その具体的な方策についての提言が行われております。

さらに最後ですけども、本年７月には教育基本法に基づき教育振興基本計画が閣議決定されました。その中で一貫した理念に基づく生涯学習社会の実現が必要であると提唱されております。このように大学の生涯学習をめぐりましては、制度的に急速に進展しつつあります。

本学におきましても総合的な教育・学生支援組織として、教育・学生支援機構が昨年設置され、本学生涯学習教育研究センターも、この教育・学生支援機構を構成するセンターの一つとして位置付けられ、本学の教育や学生支援活動における中核的な役割が期待されております。特に大学の社会貢献は、大学の持つさまざまな知的な資源を総合的、有機的に連携させて初めて十分な機能が発揮できるのではないかと考えております。その意味で本生涯学習教育研究センターが、30周年を新たな出発点として一層の発展を遂げるよう期待しているところでございます。

最後になりましたけれども、本日の記念シンポジウムを企画され準備に当たられました清國センター長、山本准教授をはじめ、ご協力、ご支援をいただきました関係各位にお礼を申し上げご挨拶とさせていただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

司会

どうもありがとうございました。今スライドショーが出ております。ここにいらっしゃる方々のお写真、あるいはお知り合いの方のお写真が載っているのかなと思いながら見ておりました。

さて、本日のプログラムの次第につきましては、こちらのとじ込みのパンフレットの方にございますので、ご確認いただければと思います。全体は一部と二部に分かれております。一部では、大学の公開講座、地域貢献がどのように進んできたのだろうかということについて、過去を振り返って考えたいと思います。そして第二部におきましては、過去を踏まえて、現在そして今後、どのような形で大学が地域に貢献していかなければならないのかということについて論じていきたいと思っております。

では、早速、本日の講演に移りたいと思います。香川大学名誉教授で、先ほども阿部理事よりご紹介がございました稲富健一郎先生をお迎えしての講演です。

先生のご紹介をさせていただきます。英文学がご専攻の稲富先生は、1966年（昭和41年）４月に香川大学学芸学部、現在の教育学部にご着任され、2002年（平成14年）にご退官されました。1974年、1981年と２度にわたりまして在外研究で英国に留学された経験をお持ちです。その経験に基づいて1985年度（昭和60年度）以降連続24年間、主にシェイクスピアを題材とした公開講座を担当してくださっております。これは現在まで、30年間の生涯学習教育研究センターの歴史の中で最長不倒記録です。おそらく稲富先生を超える先生はもう二度と出ないのではなかろうかと思われるぐらい大学の看板としての役割を果たしていただいております。本日の講演テーマは「シェイクスピアとともに歩む～公開講座を振り返って～」でございます。皆様方、ご静聴をよろしくお願いいたします。では稲富先生、どうぞよろしくお願いいたします。

第一部　講演会［前半］

（1）シェイクスピアとともに歩む～公開講座を振り返って～

稲富健一郎（香川大学名誉教授）

ご紹介にあずかりました稲富です。ご丁寧な紹介をいただいて、恐縮しております。講演ということになっておりますけど、どうも講演はできそうにないので、たぶん独り言みたいなことになると思いますが、45分間お付き合いをいただきたいと思います。

ちょっと目が見えなくなってきているので、明るくならないですかね。今ご紹介いただきましたように、今日のテーマは香川大学生涯学習の過去を振り返るということですけれども、私は一つのシェイクスピア講座を担当しておりましただけですので、全体を俯瞰するということはできないと思うんです。従って非常に狭い自分の講座のお話しかできないと思いますが、ご容赦いただきたいと思います。

先ほども紹介していただきましたように２回私はロンドンにまいりました。ロンドン大学のウエスト・フィールド・コレッジという小さなコレッジです。ロンドン大学には30いくつもコレッジがロンドンの町の中に点在しておりまして、私が行きましたウエスト・フィールド・コレッジは最も小さいコレッジです。ハンプステッド・ヒースの外れにロマン派の若い詩人キーツがちょっと住んでいた家がありますが、そのそばにありました。２回ロンドンに行きましてロンドン大学に通いましたが、ここでお話ししたいのは、モーリー・コレッジという大学です。サウス・バンクにあってロンドンの南の方にあります。この大学は長い歴史を持っておりまして、成人教育、生涯教育ですか、それを主にやっている大学で、そのためだけの大学なんですね。香川大学のように一部分が生涯学習というのではなくて、モーリー・コレッジ全体がそういう生涯教育の、あらゆる分野の講座を開いておりまして、私は２回留学しましたが、２回ともそこでいろいろなものを学びました。

友達もできて、この前もロンドンからその友達の一人が来ておりました。さまざまな講座が開かれているということ以外に驚いたのは、いろいろな社会の階層の人々、地下鉄の運転手の人とか、普通の家庭の奥さんとかが子どもを連れて来ていることでした。いろいろな社会の階層のいろいろな年齢の人たちが集まってきていて、そういう人たちと交わる機会がありました。とてもいい機会だったと思いますね。

そこで私が感じたのは日本との違いですね。日本の場合だと大学があります。そして大学があると、そこに学生が応募して入ってくるわけですけれども、大学に入る目的たるや大学で勉強することが目的ではなくて、むしろ大学を卒業した後の就職の方が主になっているということを感じていました。だから大学生は大学を卒業すると勉強しなくなる、学問がもうそこで終わってしまうわけですね。でもイギリスの場合はそれがない。特にモーリー・コレッジの場合には、興味を持ったものをどんどん楽しんでいくという人々の姿を見て、日本と違うんだなという印象を持ったんですね。

これは非常に新鮮な驚きだったんですけれども、イギリスは成人教育にすごいお金を使っていて、私が２回目に行った時の首相はサッチャーさんだったと思いますけど、その時に予算をどんどんカットして、私もそれに反対する署名をしたりしました。とにかく学問であれ芸術であれ、楽しんでいる人々の姿を見て非常に感動しました。確かにその時の経験が、香川大学生涯学習センターで講義をする場合に生かされており、非常にありがたい経験をさせていただいたと思っています。

私がロンドンから帰ってきましてすぐに、あるいは２～３年たったころでしたか、名前はまだ別の名前だったんですけども、大学教育開放センター長からぜひ講座を担当してほしいと言われ、お引き受けしま

した。何かもやもやとしているシェイクスピア研究に形を与えたいと思いましたし、また、自分がどのようにシェイクスピアを理解したかということを話したいという気持ちがありましたので。

今、ここにモーリー・コレッジの写真が出ていますね。じゃあ、先に、その授業風景をちょっと見てみましょうか。これはイタリア語を習ったイタリア人の先生です。経験されていない方は面白くも何ともないと思います。あまりたくさんのスライドはないんですが。

ちょっと話をそらすようになりますけれども、私は広島大学を卒業しましたんですが、１年生の時、教養課程に哲学の授業がありました。（最近は哲学とか文学というのは、どんどん減らされていってカットされて人員がどんどん少なくなっている。あれはとても憂うべき現象だと思っているんですけれども。）少しそのお話をさせていただきたいと思います。２人の哲学担当の先生がいらして、１人の先生は非常に人気がありまして、教室に入りきらないぐらい学生が詰めかける。もう１人の先生は、まったく人気がなくて教室に行くと受講生が２～３人しかいないんです。私はちょっとへそ曲がりなところがあって、大勢の学生が行くところには背を向け、学生の少ない先生のところで哲学の授業を受けたんですね。50年前に哲学を受けたんですけども、人気のない先生の授業をですよ、それを今でもはっきり内容を覚えているんですよ。その人気のない先生に言われた言葉を今でも覚えている。どういう内容であったかといいますと、人生をどういうふうに生きるのが一番いいんだろうかというテーマだったんです。理想的に生きるにはどういう生き方が本当に素晴らしい生き方だろうかという話だった、それを今でも覚えています。

その先生はどういうことを言われたかというと、まず机を作るという例を出された。机を作るとしますね。一つの生き方は、机を作って、そして売る、お金を手に入れる、と、これが目的。これはほとんどの人がそうだろうと思うんですね。机を作る、売ってお金をもうける、それが目的になってくる。その場合に何が目的かというと机じゃなくてお金が目的になるわけでしょう。そうすると目的と過程がばらばらになっている、これはいい生き方とは思えないと言うんですね。

皆さんはどう思われますか。みんなこうやって生きているんだろうと思うんですね。世の中の人はほとんどの人が、自分はあまり面白くないけれども、お金を得るために一応自分の気持ちを抑えて嫌々ながらでもやっていく。それでお金をもうけて、そして人生を何とかやっていく。これがほとんどの人の生き方なんじゃないでしょうか。

もう一つの生き方は、芸術的な生き方というふうに先生は言われました。机を１つ作るという場合にですよ、芸術的な生き方というのはどんな生き方なんだろう。先生が言われたのは、机を作る過程が大事で、過程を楽しみ過程で満足する。だから苦労して机の脚を切って作り、自分がそれを楽しんでいくという、これが芸術的な生き方で、最高の生き方だというふうに言われたわけですね。

それを今でも覚えているんですけれども、つまり何かある目的と、そこに至る過程とかがばらばらにならない状態を楽しむ、それに満足するという人生が最高に素晴らしいのではないかということなんですね。それがずっと私の頭にあったわけですけれども、シェイクスピアも同じようなことを言っておりまして、ハンドアウトがお手元にあるのでご覧になっていただけたらと思いますが、シェイクスピアの講座を24年間やってきたんですけれども、重要な言葉が２つあると私は思っているんです。

一つは、１のところをちょっとご覧になっていただきたいと思うんですが、メメント・モリ（memento mori）というラテン語がここへ書いてありますけれども、それと次の２番、カルペ・ダイエム（carpe diem）、これもラテン語で２つともラテン語ですけど、よくシェイクスピア時代に使われた言葉です。ちょっと脱線しますけれども、シェイクスピア時代のラテン語といいますと国際語であったわけで、今の日本における英語みたいなもので、当時小学校のことをグラマー・スクールと言っていたんですね。グラ

マーは文法です。小学校の名前がグラマー・スクールとは、いかにもおかしな名前だと思うんです。そのグラマーというのは何かというと、ラテン語のグラマーなんですね。ラテン語の文法を教えていた。だからシェイクスピアも小学校のころはラテン語の文法を習っていたんですね。ラテン語が非常に重要だった。

それでここへラテン語を書いているわけですけども、まずメメント・モリというのは「死すべきことを忘れるな」という意味なんですね。これはどういうことかというと、人間は必ず死ぬということ、人間は必ず死ぬということをいつも覚えておきなさいという意味です。なぜそれが必要かというと、我々人間は変なことにすぐ惑わされてしまって本質が見えなくなる。すぐうわべに目がいって本質が分からなくなる。そういう人間の弱さをみんな持っているわけで、それに対抗するために何が必要かというとメメント・モリ、いつも自分は死ぬ人間である、いつかは死ななきゃならない人間であるということを自覚することです。死から生を見直そうとする人生観はシェイクスピアの劇の至るところに出てくるんですね、人間は死すべきもの、必ず死ぬ、いつかは死ぬということです。

もう一つは次の２のところです。前者と関係あると思うんですけど、カルペ・ダイエム、イギリス流に言うとダイエムです。たぶんラテン語の本来の発音はディエムだろうと思います。カルペ・ディエム。これは「一日一日をつかめ」という意味ですね、一日一日をつかめというのはどういうことかというと、「一瞬一瞬を充実して生きなさい」ということですね。

カルペ・ダイエムとメメント・モリは、関連があると思うんですね、人間いずれは死ぬ、皆さんも永遠には生きられないわけで、この瞬間、こういうふうにご一緒しているわけですけれども、いつかは必ず死ぬという、その死ぬということをいつも感じるということ。死を感じることによって充実して生きる、一瞬一瞬を充分に生きる、２つはお互いに関連していると思うんです。その２つが連動して、人生を生き生きと生きさせる２つの句ではないかと私は思っております。ちょっと乱暴かもしれませんが。

私が教養部の時に話を聞きました、学生に人気のなかった哲学の先生の話に戻りますが、お金を得ることが目的であれば、目的までは意味がないわけですよ。我々が、今、生きているやり方では、お金が目的だから机を作る過程はどっちだっていいということになる。しかし芸術的な生き方になりますと、机を作っていく瞬間瞬間が喜びとなり、瞬間瞬間が満足となる、これぐらい素晴らしい人生はないということになるんですね。

シェイクスピアが繰り返し言っていることは、何事でも楽しむということが大事だということですね。いつでも楽しむ、それでいいんだ、現在この場を楽しみなさいとシェイクスピアは絶えず言っている、発信していますね。一刻一刻を楽しむということについてですが、またハンドアウトを見ていただけたらと思いますけれども、今日のテーマは「知の循環」ということで、知というのは非常に大事なことになっておりますけれども、シェイクスピアは時として知というものを否定することもあります。旧約聖書『伝道の書』に、「それは知恵が多ければ悩みが多く、知識を増すものは憂いを増すからである。」とあるように、知でもいろいろな知があるからだろうと思うんですが、単なる知だけを追求するということの危険性をシェイクスピアは知っておりましたね。

『じゃじゃ馬ならし』の引用文をそこへ書いております。ルーセンシオという若者が宮廷にやって来るわけですね。（イタリアでは昔は宮廷が学校の働きをしておりましたから、地方の若者は宮廷に行っていろいろな学問を学んでいました。）そのルーセンシオがパドバに来るわけですが、その時に召し使いのトラーニオに「どうしたらいいんだろうか、これから学問もしたいんだが」と言ったら、その召し使いがなかなかいいことを言うんですね。そこでちょっと見ていただきたいんですが、

楽しまないと身に付かないものです。
簡単に言えば一番好きなものを勉強なさればよい。
No profit grows where is no pleasure ta'en…
In brief, sir, study what you most affect.
（『じゃじゃ馬ならし』 1.1.39-40.）

というふうに言うんですね。これは召し使いとしては非常に気の利いた素晴らしいせりふじゃないかと思うんですが。嫌々ながらやるということじゃなくて、好きなものを楽しむということが、どれほど大切かということ。満足と喜びを得ていくということが、いかに大切かということをシェイクスピアはここでも言っているわけですね。

その次にハンドアウトを続けていきたいと思いますけれども、これは『十二夜』でフェステという道化が歌う歌の内容です。

恋とは何だろう、未来にあるのではなく、
今の喜びに今の笑いがある。
未来に何が起こるか分からない、
ぐずぐずしていていいことはない。
さあ、来てキスしておくれ、可愛い、可愛い、お前。
青春は長く続かないのだから。
What is love, 'tis not hereafter,
Present mirth hath present laughter:
What's to come is still unsure.
In delay there lies no plenty,
Then come kiss me, sweet and twenty:
Youth's a stuff will not endure.
（『十二夜』 2.3.49-54.）

というふうに歌うわけですね。歌自体も一瞬一瞬消えていくわけですけど、人生と同じですね。ここでは恋のことを歌っていますけれども、恋を人生に置き換えてもいいわけですね。人生は短いけれども、青春はもっと短い。日本の歌にもありますね、「命短し恋せよ乙女」という歌もシェイクスピアと同じことを言っているわけです。こういうふうに一瞬一瞬を楽しむということが実に重要である、一瞬一瞬に満足するということがとても大事なことであるということをシェイクスピアは繰り返し言っているんです。

その背景は何かといいますと、やはり先ほども言いましたように、一番最初の引用文でありますが、メメント・モリですね。人間はすぐ死ぬ、いずれは死ぬんだ、早く死ぬ人がいたり、遅く死ぬ人がいたりするけれども、例外なく全員が死んでいくという、認識が背景にありまして、それ故に喜びとか満足がいかに重要であるかということが自ずと浮かび上がってくるんだろうと思いますね。

私のことを言って申し訳ないんですが、私は高校の２年生の時に肺結核になりまして、もうたぶん死ぬんじゃないかと思っていました。高熱が続きましてすべての音がどんどん遠くに離れていくんですね。毎日毎日そういう高熱と、いろいろなことに悩まされ、レントゲンを撮ると左が真っ白だった。これが死ぬ

ということだなという感じを持つようになりまして、１年８カ月入院していたんですけれども、その経験、メメント・モリで、人間は死ぬんだという感覚が絶えず付きまとうようになりました。

私はシェイクスピアを読む時、あるいはシェイクスピアについて話す時、必ずそのバックには死があると感じています。ここで、シェイクスピア時代がどんな時代だったかとちょっとお話ししておきたいんですが、シェイクスピアの時代というのは、非常に素晴らしい時代だったことは確かですけれども、ペストがはやったんですね。肺結核と同じようにペストでたくさんの人が死んだ。シェイクスピアの生まれた町、ストラトフォード・アポン・エーボンという小さな町へ行きましたけれども、そこの人口の３分の１か３分の２かどっちだったか覚えていないんですけれども、それぐらい人口がペストで亡くなった。高松の３分の１の人口がばっと亡くなるって恐ろしいですよね、そういう時代だったんですね。だからシェイクスピアが劇をやっていた劇場も、しばしば閉鎖になったんです。ペストが蔓延するとすぐ閉鎖になる。だからシェイクスピアの時代というのは死と非常に近かった。周りの人がどんどん死んでいくから、シェイクスピアの時代は、むしろ今の日本よりはずっと死が近かったのではないかと、死が近くに感じられたのではないかと思うわけですね。

それともう一つは内乱ですね、内戦、薔薇戦争というのがありまして、源氏と平家じゃないけれども、白薔薇と赤薔薇の２派に英国が分かれて争っていたんですね。それについてシェイクスピアは10の劇を作っておりますけれども、そこで戦争の告発をしている。死が非常に近かったんですね。血で血を洗う悲惨な状態が長いこと続きました。シェイクスピアも、もう嫌になっていたと思いますね。

エリザベス１世が戴冠して平和な時代が来るのですけれど、その後すぐ今度は清教徒革命が起こりました。これも内乱ですね。王党派と清教徒側が争う。ついに王様を処刑するというようなことがおこりました。イギリスはシェイクスピアの時代の前後、内乱で苦しんでいたんですね。死が非常に近かったわけです。だからメメント・モリが示しているように、いつも死のことを考えていなければならなかった。そうすることによって一瞬一瞬に満足し、一瞬一瞬が大切であるということを実感して生きていく、こういう生き方をシェイクスピアは重要だというふうに考えていたと思いますね。死を忘れないようにする、いずれは私も死ぬのだということを感ずることにより、満足、喜びがいかに大事であるかを知らされるようになるのではないでしょうか。従ってカルペ･ディエム（ダイエム）とメメント･モリ、この２つの点がシェイクスピアの人生観の根幹にあるんじゃないかと思っております。

ここで現代について考えてみましょう。それと関連して、皆さんと一緒にちょっとお金のことについて考えてみたいと思います。みんな我々はお金に全てを換算して生きている。お金だけあれば何とかなるというふうに考えて、生きる瞬間瞬間がおろそかになっているのではないかと思われるわけですね。例としてお話ししましたように、机を作る場合、極端に言えば作るのはどっちでもいいから、お金だけが欲しいということになってくるわけですね。ハンドアウトに挙げております『ウィンザーと陽気な女房たち』の引用ですけれども、「お金が前を行けば、すべての道は開ける」、お金が前を行ったら、お金が行く後ろには道がどんどんできてくる、開けてくる、つまり、お金さえあれば何とでもなる、どんなことでもできるという意味です。

古い話になりますけどホリエモンね、もう古くてお忘れでしょうか、人の心も金で支配できると豪語した人ですけど、ホリエモンさん、今どう思っておられるかちょっと聞いてみたいんですが。お金があれば何とでもできると我々は信じていて、保険を掛けたり、貯金をしたり、いろいろなことをしてたくさんお金をもうけて、そして自分の身をガードしたら安全だろうと何となく無意識に思っていませんか。私なんかも何となくぼんやりとお金があったら安心できるかなというような気がしているんですけども、ハンド

アウトにそれと反対のせりふを引用しております。

これは『ロミオとジュリエット』のせりふですけれども、「それ、金だ、人の魂には毒より恐ろしい毒だ。この忌まわしい世の中ではもっと多くの人を殺す。お前が売れぬと言うこんな大したものでない毒よりはな。」これは説明しますと、ロミオがジュリエットは本当は死んでいないんですが死んだと聞いて、自殺する決意をするんですね。自分の愛するジュリエットがいないこの世はもう意味がないから死のうと自殺する決意をして毒を買いに行くんです。毒薬を薬屋にね。ところが薬屋はその毒を売ったら私が死刑になるから、売れないと言うんですよ。その時にロミオが言う言葉ですね。薬屋、お前はこの毒薬を売ったら死刑になるので売れないと言うけども、実はその金の方が毒よりももっと多くの人を殺すのだと言っているんですね。

我々は金を一生懸命得ようとしている。逆に毒というのは嫌ですね。だけどよく考えてみると、お金だって危ないぞ、我々が普段何となくいいなと思い、寄り掛かろうとするものについて本当にそうなのか、信頼しているけど、本当に信頼に足りるかという問いをシェイクスピアは絶えず発信し続ける、ここもそうですね。お金って本当に大事なの、本当にあなたを守ってくれるのかと言っているわけですよね。

三笠フーズが世間を騒がせている話がありますけれども、あれはひどいですよ、ものすごい暴利を得ているでしょう。政府から食べられない米を安く買って、ものすごい利益を上げていろいろなところに養老院、じゃないか、今は老人ホームというんですね、養老院と言うと怒られるので、正しくは老人ホームに売るとか、それから学校給食に売るとか、もうめちゃくちゃでしょう、金のためなら何でもする。それで食べた人は死ぬかも分からんですよ。黴と、それから農薬とかいっぱい入っている、食べるわけにはいかん。それはまさしくこのロミオが言っていることと同じことですよね、もう本当に世の中どうなっているのか。

ここで脱線しますが、シェイクスピアについて24年間お話ししてきましたけれど、私はこの前、澤地久枝さんのお話を聞いて、シェイクスピアについて24年間話をし続けてきたけれども、本当にそれでいいのかなと思いました。なぜそう思ったかというと、シェイクスピアを鑑賞するだけでいいのかな、シェイクスピアは、絶えずこれはおかしいと思わなければいかんというふうに言い続けているのに、それを放っておいていいのかなという感じが、あの講演を聴いてしましたね。特に戦争についてですね、戦争というものがどんなに恐ろしいものかということですね。それは我々でも食い止められるんだという勇気を与えられました。それは重要なことです。だから私たちはじっとしているんじゃなくて、正しいと思ったことは行動しなければならんのじゃないか、という気持ちを起こさせられたという気がするんですが。今の話ですけど、お金がない、お金がないと言いながら、軍備は増強されて人殺しをする兵器が高性能のものができてきて、そして、それにお金に糸目をつけずどんどん使っている。つまりこれだってお金のことより兵器を造ることに喜びを感じている人がいるのかもしれないけれども、知りませんけども、それは恐ろしいことですね。

だから現在を楽しみなさい、満足しなさい、生涯学習によってそういうことが可能になる、これは大事なことですよね。しかし、ひょっとして高松に、今、原爆が落ちたらと想像してみましょう。たぶん広島の人だって60年前に原爆が落ちるとは、当時思っていなかったんじゃないですかね。今、高松に原爆が落ちてこないと我々も思っているけれど、ひょっと落ちてくるかもしれない。そうしたらもう鉄を溶かすような熱線が肌を焼くという恐ろしい地獄が始まる。そうなったら人生を一瞬一瞬楽しめなくなるじゃないですか。そういう戦争の恐ろしさを知らない世代がどんどん増えていて、何だか恐ろしい方向に向かっているような気がするんですけれども。戦争が起こって苦しむのは一般の弱い市民ですね、上の命令する方

は安全なところにいるわけですから。

これはまたテレビで知ったことですけれども、イラクでアメリカ兵が発砲する率というのは25％ですってね、だから本心はほとんど撃ちたくないんだということですね。アメリカ兵が銃を構えて発砲するという確率は25％にとどまっている。しかし国家がそれをあおる。つまり敵が人間だと思うと兵士は撃てないんですって。敵が人間だと思わせない、敵は人間以下、動物であると思わせるような教育をするんですってね、そうすると発砲率が上がってくる。そんなことまでして何故戦わなければいけないのか。

そこに引用しておりますけれども、シェイクスピアも内乱で苦しんだ過去を描いたんですね、薔薇戦争で家族がめちゃくちゃになっていく。一番最初は社会の上部から腐っていくんですね、政治の上の方からどんどん下がってきてついには家庭が破壊される、その状況を歴史劇でシェイクスピアは克明に描いているんです。引用を見て下さい。『ヘンリー６世』の第３部を引用しております。これはどういう状況かというと、赤薔薇と白薔薇に分かれて親父と息子が戦っているわけです。知らずに息子が相手方についた親父を殺す。昔は常套手段だったらしいけれども、息子が殺した相手の財布を取ろうとする。そして顔を見たら自分の父親だったというんです。シェイクスピアは、その時いかに戦争が残酷であるかということを、そこで示しているわけですけど。ちょっと読んでみます。

そして俺は、その手で命を与えてくれた父から、
この手で命を奪うことになってしまった。
許してください、神様、知らずにしたのです。
許してください、お父さん、あなたとは知らなかった。
涙で血痕をぬぐい去ってしまおう、
涙を流しきるまでもう何も言うまいと。
And I, who at his hands received my life,
Have by my hands of life bereaved him.
Pardon me, God, I knew not what I did!
And pardon, father, for I knew not thee!
My tears shall wipe away these bloody marks;
And no more words till they have flow'd their fill.
（『ヘンリー六世・第三部』 2.5.67-72.）

何ともつらい思いだっただろうと思いますね。家族というのは一番大事ですけれども、戦争というのはそれを破壊してしまうということですね。生涯学習を楽しむためには、社会は平和でなければならない。戦争の中では不可能でしょう。つまり、前提条件は平和であることでしょう。そのためには、言葉のレヴェルにとどまっていないで、行動へと移行しなければならないと思われます。

生涯学習というのは、結論になりますが、就職とか資格取得とか何か目的があってそれに向かって学習するというのではなくて、その学習自体が目的になる、学習自体に満足と喜びを感じられる、そういうものであって欲しいし、そういうふうになるように努力を24年間続けてきたつもりですけれども、成功したかどうかちょっとよく分かりません。

最後にモンテーニュの言葉を引用して終わらせていただきたいと思います。一番最後に書いております。「人生の有用さは長さではなくて使い方にある。長生きしてもほとんど生きなかった者もある。年数

ではなく意思にかかっている。」テレビを見ると、いかに命を長くするかということばかりで、その生きている瞬間をどう生きるか、どうやって意味あるものにするかという視点がないですね。ほとんど料理の番組か健康の番組か、ただ生きる年数を長引かすだけの話で、生きている間をどう生きるか、どうやったら充実できるかという、そこには何のスポットライトも当てられていない。生涯学習がそこにスポットライトを当てて、注意を引いて、そこに何か生きる意味を見いだしていくということが必要なのではないかと思います。ちょっと時間も過ぎましたけれども、これで独り言、訳の分からないお話を終わらせていただきます。どうも失礼しました。

司会

稲富先生、どうもありがとうございました。非常に深いお話であった思います。楽しみとか喜びとか言うわけですが、その楽しみ、喜びって何だろうか。先生の言葉の奥にまだあるんだろうな、それが哲学であったり、人の誠意というものであったりするものなんだろうと感じております。普通は現在の事象の中に過去の出来事、あるいは過去の教訓などを用いて話をするということですが、絶妙にといいますか、過去の話をしながら現代のホリエモンを持ち込んでみたり、あのテクニックは私も学ばなければいけないなと感じました。

それでは第一部の後半に入りたいと思います。続きまして２つ目の講演は「公開講座の源流を探る」、当センター准教授の山本珠美より発表いたします。

第一部　講演会［後半］

（２）公開講座の源流を探る

山本　珠美（香川大学生涯学習教育研究センター准教授）

皆さん、こんにちは、山本です。今まで50分ほど、稲富先生から24年間続けてこられました公開講座のエッセンスについてお話しいただきましたが、そもそも大学は正規課程の二十歳前後の学生以外の方々、一般の住民の方々に、公開講座というものをいつごろから始めたのでしょうか。今日ご来場の皆様方が行っているような学習が、歴史的にどのように位置付けられるのだろうか、ということをお話しするのが私の役割です。「公開講座の源流を探る」というテーマで30分ほど私からお話をさせていただきたいと思います。

そこで、最初に皆様にクイズをいたします。そもそも、香川大学が一般の住民の方々に公開講座という形で学習機会を提供する事業は、いつごろから始まったものでしょうか。三択で聞いてみたいと思います。１つが30年前。今日のシンポジウムが生涯学習教育研究センターの30周年記念ですが、センターができたころに始まったのではないか、というのが１番目の選択肢ですね。

いえいえ、もっと前からではないか。２番目の選択肢は60年前です。60年前といいますと1948年ということになります。戦後ですね、第２次世界大戦が終わってすぐ、そういう事業が始まったのではないか。

いえいえ、そんなものではなく、もっと前からではないか、80年ぐらいさかのぼれるのではないか。これが３番目の選択肢です。80年前ということは1928年ということになりますが、実は昭和初期から住民向けの講座をやっていたのではないか。さあ、いかがでしょうか、30年前なのか、それとも60年前なのか、はたまた80年ぐらい前なのか、別に指したりはしませんので、その場で手を挙げてみて下さい。

では、１番目の30年前、センターができたころからではないかと思われる方。はい、ありがとうございます。次に、戦後すぐの60年前ぐらいではないかと思われる方。はい、ありがとうございます。１番、２番だいたい同じくらいだったかなという感じがしました。それでは３番目、もっと前、戦前、80年前ぐらいからではないかと思われる方。はい、ありがとうございました。ちゃんとは数えていませんが、前から拝見していますと、だいたい３分の１ずつ分かれたなという感じがいたします。

実はこれは３番が正しいんですね。80年前というのが正しいわけです。それでは、これからその80年間の歴史をスライドでたどってみたいと思います。

歴史を語る時にはだいたい古い方から語っていくものですが、今日は逆に新しい方からたどっていってみようと思っています。30周年記念の講演会ということで1978年（昭和53年）ですね、大学教育開放センター、生涯学習教育研究センターの前身が作られたという年です。ちょうど30年前です。1991年（平成３年）に名前が変わったというのは最初の副学長の挨拶でもありました。この写真、昔からセンターの事業に参加してくださっている方は懐かしい思いをされるかもしれません。今の生涯学習教育研究センターは、香川大学教育学部キャンパスにありますけれども、30年前の段階では経済学部キャンパス内にセンターがございました。これがその当時のセンターです。

では、30年前に、どうしてこういうセンターが作られたのでしょうか。その当時のことを前後にわたって書いてみましたが、大きかったのは1964年（昭和39年）に文部省から通知が出ました「大学開放の促進について」です。この通知が出されることによって、全国各地の大学で公開講座というものが少しずつ進んでいったと言われています。そして1973年（昭和48年）、東北大学にセンターが作られました。これが

全国で初めてのセンターです。そして1976年（昭和51年）に金沢大学のセンターが作られました。これが２番目。そして２年後に香川大学の大学教育開放センターが作られました。それが全国で３番目だったんですが、いずれもここに挙げたのは国立大学です。私立大学でも、今、生涯学習センターというようなものは作られておりますけれども、その嚆矢となったのが、1981年（昭和56年）の早稲田大学エクステンションセンターだと言われております。香川大学にセンターが作られたのは、比較的初期の段階なんですね。このあたりにまず３つの大学で設立され始めて、その後80年代90年代になって徐々に増えていったということです。

これが30年前の状況ですが、30年前にセンターが作られる前から、実は公開講座は行われていました。一気にさかのぼりまして60年前、正確に言うと59年前ということになりますが、香川大学の設立が約60年前ということになります。1949年（昭和24年）５月31日に経済学部、学芸学部（現在の教育学部）からなる香川大学が発足しております。香川大学が誕生したその年の９月に、経済学部が第１回目の専門講座というのをやっております。当時名前は公開講座ではなく専門講座というふうに言っておりましたけれども、大学ができたと同時に地域向けの講座というものは始まっていたわけですね。

また少しその前後のことを書いてみましたけれども、戦後法律が変わりました。学校教育法というものができます。1947年（昭和22年）のことです。そして香川大学が設立されたのと同じ1949年、昭和24年には、社会教育法という法律が新しく制定されました。この２つの法律いずれにおいても、公開講座というものを奨励したのです。名前が統一はされていませんが、公開講座と言ってみたり、文化講座と言ってみたり、専門講座と言ってみたり、さまざまな言葉遣いはされていますが、内容としては住民向けの講座を進めていきましょうということが言われたわけです。

こういうこともあって、この時期に公開講座が各地で始められたんですね。香川大学は、そのままずっと続けていってセンターができたわけです。継続されなかった大学もあったようですが、香川大学の場合はこの時期からずっと継続して行われていたのです。今日、後半のシンポジウムにお呼びいたしました金沢大学さんも、この時期ですね、1951年（昭和26年）に第１回の大学開放講座、今で言うところの公開講座が実施されています。新制大学ができた当時から実はやっていたわけですね。今のように、センターがあって大々的にやっているというわけではないんですけれども、細々とではあったかもしれないけれども続けていたわけです。

さて、香川大学ができたのが60年前で、その当時から公開講座をやっていたということですが、先ほど答えは80年前だったじゃないか、それはおかしいじゃないかと思われてしまうかもしれません。次に、これは遠くの方はちょっと見えにくいかもしれませんけれども、高松市の昭和12年の地図です。高松駅のあたりが切れてしまっているので出てはいないんですが、このあたりが駅ですね。線路があるから分かるかと思います。これが高徳線、これが予讃線ですが、ここに今、幸町キャンパスがあります。北の方に教育学部、南の方に経済学部キャンパスがあります。今、香川大学のキャンパスのあるところには、戦前もすでに学校は存在したわけです。学芸学部、教育学部の前身は師範学校、そして経済学部の前身は高松高等商業学校だったわけです。そして、調べてみますと、この高松高等商業学校、ここが実は全国的に見てもかなり熱心に公開講座を実施していた学校だったんですね。今から80年前というと1928年ですが、もうちょっと前です。1925年（大正14年）にこの高松高等商業学校が夏に夏期講演会を開催します。高松高等商業学校が授業を開始したのが1924年（大正13年）ですから、開校の翌年ですね。できたとほぼ同時に、こういう一般向けの講演会というものを実施していたということが判明しております。

今、前に映したのが、ちょっと画像は粗いんですけれども、高松高等商業学校の正門ですね。高松空襲

の時に焼けてしまいました。次は銅像なんですが、経済学部キャンパスの中には２つ銅像があります。そのうちの一つです。２つのうちの一つは、これは皆様よくご存じかと思うんですが大平正芳さんです。大平正芳さんは高松高等商業学校を卒業されて、その後、総理大臣をなさった方、今からそれこそちょうど30年前です。1978年に時の福田内閣が倒れまして、福田赳夫内閣の方ですけれども、その後、大平正芳内閣になった、その大平さんの銅像が１つ目。ですが、実はもう１つあるんです。この写真がもう一つの方の銅像で、あまり皆さんはご存じないと思われますが、隈本繁吉という人物です。この人が高松高等商業学校の初代の校長先生です。なかなかお名前をご存じないかもしれませんけれども、例えば松本清張の『小説東京帝国大学』の中に実名で登場してきたりだとか、あるいは『夏目漱石全集』を見ていますと、夏目漱石とも親交があったらしく、所々でお名前が出てきたりというような方だそうです。この隈本繁吉初代校長が、かなり地域貢献ということに熱心だったということが調べていくうちに分かったのです。香川大学の公開講座、延々と歴史をたどっていくと、ここにまでたどり着きます。

では、この1925年の夏期講演会、どんな内容だったのか、ちょっとご紹介させていただきます。日程は大正14年７月15日水曜日から21日火曜日、７日間連続で毎日午後７時から９時50分まで合計21時間の講座だったということです。会費、お金の話は何となくしにくい雰囲気かもしれませんが、１円50銭。当時、お砂糖１キログラムが50銭弱だったそうです。砂糖３キロ分の価値があったのかどうかは分かりませんが、とにかく会費は１円50銭でした。

内容ですけれども、高等商業学校だったということもございまして、商業関係あるいは経済関係の内容が多いなというのが分かるかと思います。「科学的管理法」なんていうのはまさにそうですし、「経済生活の社会化」だとか、「経済思想発展の跡をたどって」とか、経済という言葉が目に付きます。あるいは、この大正14年（1925年）というのは、第１次世界大戦が終わってしばらくした時期ですので、国際関係というものに人々の関心は高かったように思えます。「外交問題」とか、「欧州大戦のイギリス国民経済に及ぼした影響」とか、そういうわりと硬いテーマで講演が行われていたということです。

さて、この講演会ですけれども、当時、香川新報という新聞がございました。今の四国新聞の前身です。四国新聞は戦後に四国新聞になったわけでして、それより前、この時期はまだ香川新報と言っていました。当時の新聞を香川県立図書館で発見しまして調べてみたところ、香川新報がどういうふうに報じていたのかといいますと、こんなふうに書いてありました。「講演の内容は学術的にまとまった極めて有益なるもので、いずれも学識経験ある斯道の講師が、深き蘊蓄を平易に理解しやすく説くといえば、興味津々たるものがあるであろう」というようなことが書かれてあるわけですね。大変期待が高かったということが伺われます。前後して、この夏期講演会について大変多く紙面を割いて報道しています。

中には現時点から見ると面白い記事もあります。これは夜間の講座でした。当時、交通手段はどうだったかと言いますと、この大正14年、高徳線ができたのがこの年なんですね。ようやく高徳線ができたという年です。予讃線はすでに通っておりました。通ってこられないこともないという状況ではあったようですが、とはいえ終わるのが夜の９時50分です。ということで、当時、高松高商は何をしたかというと、新聞記事にこんなのがあったんですね。希望する者には寝室と蚊帳を貸し出す、と。

脱線しますが、この当時の記事をいろいろ調べてみますと面白いなと思います。高松高等商業学校は新しくできたばかりの学校ですので、全国各地から新任の教員が集まってくるわけです。中には小樽の高等商業学校から来た先生もいます。東京から来た先生もいます。神戸から来た先生もいます。いろいろなところから来たその新任の先生が、新任の挨拶というのをします。それが記録として残っているんですが、高松に来て気になったことが３つあるというんですね。１つ、溜め池が多い。２つ、自転車が多い。そし

て３つ目、蚊が多い。その当時の新聞を見ますと、本当に蚊に関しての報道は多くて、１番目の溜め池、２番目の自転車が多いというのは、今でも通用するかなと思うんですが、その当時は、蚊が多いというのが外から来た方々にとっては非常に興味深いところだったようであります。とにかく寝室と蚊帳を貸し出すというような新聞記事が出ていました。

あるいは、この講演会は基本的には高松高等商業学校の先生が講演をしたわけですけれども、中には大変有名な先生を外からお呼びしてという場合もありました。そうすると、アイドルの追っ掛けよろしく新聞記事に何時何分高松港着の船でやって来るというようなことが報道されていたり、あるいはその先生はどこそこにお泊まりになられるみたいな、そんなことまで書いちゃっていいんだろうかというようなことが書かれてあったりします。この講演会、実際全部で300人ぐらい集まったということですけれども、大変なにぎわいを示したということだそうです。

その当時、1925年前後ですけれども、こんなことがありました。1919年（大正８年）に、ちょっと漢字ばかりで申し訳ないんですが、高等諸学校創設及拡張計画というものが帝国議会の中で可決されました。今どこの都道府県に行っても必ず国立大学というのはありますよね。香川には香川大学、徳島に行けば徳島大学、高知に行けば高知大学、愛媛に行けば愛媛大学、岡山に行けば岡山大学というふうに１県に必ず１校、国立大学はあります。東京だとか大阪だとか北海道みたいな広いところ、あるいは人口が多いところは国立大学の数も１つに限らないわけですが、なぜそういうふうになったのか、あるいはいつごろそういう体制ができたのかといいますと、これなんですね。この高等諸学校創設及拡張計画が非常に重要でして、原敬内閣、初の本格的政党内閣といわれる原敬内閣による計画です。全国各地に満遍なく官立の、今で言うところの国立ですね、国立の高等教育機関を作りましょうということで、沖縄県を除いて、１府県１高等教育機関が実現しました。すべての県に高等教育機関ができました。当時は大学もありましたが、香川県でしたら高等商業学校、徳島だったら高等工業学校というふうに大学とは限らないんですが、後にその土地の県名大学になるような学校が作られたのが、この大正８年の前後だったわけです。高松高等商業学校は12番目の高等商業学校として作られました。全国に高等商業学校というのは13校ありました。プラス、実は植民地に３校あったんですけれども、今の国内で見ますと13校です。その12番目ですから遅い方なんですけれど。２番目は神戸高等商業学校です。神戸高等商業学校はだいぶ昔にできているわけですが、そこに商業研究所という研究所が作られまして、ここがさまざまな講座を実施していました。

さて、高松高商では、夏期講演会をやったその翌年から成人教育講座というものを実施します。これは昭和16年度まで毎年継続しましたが、これが戦後のいわゆる公開講座になっていくわけですね。夏期講演会およびこの成人教育講座というのが昔の公開講座の形式だったわけです。そして、こういった事業を推進していくための部局として、高松高商に商工経済研究室というものが作られていました。これが今のセンターの前身とは言えませんけれども、センター的なことを戦前やっていたところなんですね。

そのモデルとなったのが、おそらく先ほど挙げた神戸高等商業学校の商業研究所だろうというふうに思われるわけです。後ろの方は見にくいかと思いますが、お手元に同じ資料が入っておりますので、後でご覧になっていただければと思いますけれども、商工経済研究室が何をやっていたかというものなんですね。細かいことは一切見る必要はございません。一番上のところをご覧下さい。内部事業と対外事業と２つのことをやっていたと言っているんですね。対外事業として集会の開催があります。講演会だとか、あるいは連続講座であったり、あるいは展覧会をやるだとか、映画会をやる。映画会はチャップリンの映画ですとか、あるいはツェッペリン号という飛行船が世界一周をすると、その時の記録映画だとか、そういうものを階段教室、こういうような教室がありましたので、そこで映画会を開催する。展覧会について

は、当時は今のように気軽に海外旅行はできませんから、海外で集めてきたさまざまな物品をそこで見せるというようなことをやっていたりしました。それから面白いところでは、ラジオの受信会というのをやったというんですね。大正14年というのがどういう年か、高徳線ができた年と先ほど言いましたけれども、今のNHKの前身の東京放送局というのができて、そこが初めてラジオ放送をしたのが大正14年だったんです。夏期講演会が始まった年ですね。大阪でも同じ年に放送が始まっているのですけれども、それをじゃあ受信しようということで、何と、すごい大雨の中400人もの人が高松高商に集まってラジオの受信をしたというようなことが大きな新聞記事になっています。そういう地域住民にとってのある種の何と言いましょうか、学習の場でもあるんだけれども、文化センター的な役割も果たしていたと言えばいいでしょうか、そんな事業を行っていたというわけです。

ちなみにこちらのチラシは、私が大学の中から発掘いたしました。まさに発掘といった言葉がぴったりくるような感じなんですけれども、昭和４年度の成人教育講座のチラシです。今の公開講座のポスターだとか、チラシだとか、ああいうものの昭和４年のバージョンです。公民科だとか経済科だとかというのが書いてあるのが分かるかと思います。聴講料は無料ですが、資料代として50銭くださいというようなことが書いてあったりします。

このように、たどっていくと83年前までたどれるんですよということですが、日本における公開講座の発展をもう少し見ていきますと、おおむね４期に分かれます。４期に分かれるんですが、高松でといいますか、香川県で行われていたのはここに書いてある２期から始まっていくわけですね。第２期、すなわち大正から昭和初期のころに高松高商が成人教育講座などをやりましたと。その後、第３期、つまり第２次世界大戦後に社会教育法だとか、学校教育法という法律ができることによって、いろいろなところでおびただしいかつてない盛況といわれるような大学公開講座の盛り上がりの時期というのがあったと。そして第４期、センターができた頃ですね、70年代、公開講座を専門的に行う部局ができましたというような形で流れていきます。ただし、日本全体に目を向けてみると、まず第１期というのがあったんですね。この第１期に、私立大学が巡回講演あるいは講義録というものを出版して、通信教育のようなことを始めたりということをしているわけです。その嚆矢となったのが、1886年（明治19年）にまでさかのぼりまして、早稲田大学、昔は東京専門学校と言っていましたが、ここが始めました。

それはいったいなぜなのか、そもそも公開講座的なものが日本で始まった最初のきっかけは何だったのか。先ほど稲富先生が、お金のためにうんぬんとかって仰っていましたけれども、実はお金が欲しかったんですね。当時、官尊民卑で帝国大学には国がお金を与える。だけど私立の大学にはお金はやらんということで、大学は自ら稼がなきゃいけなかった、と。発展していくためにはどうしても大学のことをアピールもしなければいけないし、学生の勧誘もしなければいけない。そのために巡回講演会というものを始めていったわけです。明治の時期にそういうものを始めたわけですが、香川県にも巡回講演に来ていますから、私立の大学がまずは先導したわけです。では、何で私立大学はこういうことを明治初期に始めたのかといえば、家永豊吉という、この方は早稲田大学の先生だったんですが、欧米を学んでいるわけですね。ヨーロッパあるいはアメリカの大学では、大学というのは二十歳前後の学生だけに授業をしているわけではなく、地域住民に対しても講義をやっているんだということを紹介したわけです。それが基になって私立大学で公開講座的な事業が盛んになっていったのです。では、誰が欧米でそのようなことを始めたのか、それは誰かといいますとジェームズ・スチュアートという方です。

皆様、お手元にこのパンフレット一式お渡ししているかと思いますが、パンフレットを開けますと、ここにいろいろな資料が挟まっています。この資料をちょっと取ってください。取って後ろに現在の生涯学

習センターの写真がありまして、上に２人の偉人の言葉というのが挙がっています。下の方、英語で書かれているこの言葉、これはジェームズ・スチュアートが1871年にケンブリッジ大学に対して、学生だけではなくもっと外に向かって講座をしていきましょうよということを、大学当局に訴えた書簡の中の一文なんですね。「真の教育は継続的でなければならないし、また十分学識のある人から与えられるものでなければならない」という言葉をジェームズ・スチュアートは言います。この言葉はよく引用されるんですが、だからこそ大学は地域住民に向けてさまざまな講座をやっていく責務があるんだということを言った。1873年からケンブリッジ大学が巡回講演、拡張講座、今の公開講座の源流にあたるものを始めていったということになります。

ということで、駆け足でずっとさかのぼっていったんですが、教科書的にはこれで終わりになります。生涯学習概論という授業を私は担当しておりますけれども、生涯学習概論の授業などでは、大学の公開講座というのはここに行き着くんだよという話で終わるわけです。けれども、実はこういう話があると、こっちではもっと早くからやっていたという話が出てくるんですね。

その一つの事例として、もう一つさかのぼってしまいますが、日本には1717年（享保２年）、これは暴れん坊将軍、徳川吉宗の時代ですが、湯島聖堂で仰高門日講が開始された、という記録があります。湯島聖堂というのは、この当時はまだ林羅山などで有名な林家の私塾があっただけなんですが、後に江戸幕府の官立の学校、高等教育機関である昌平坂学問所というものになっていくわけです。ちなみにこれが後に東京帝国大学になります。ですから東京帝国大学の前身のさらなる前身であるところの湯島聖堂で、当時、武士だけに許されていたはずの学問を、どんな人たちでも聞いてもいいですよという、そういう講座を始めたということが明らかになっております。身分の別なく誰でも学びたい人が来て学んでくださいというようなことが、大学ができるもっと前からあったんだと。

最後になりますけれども、先ほどジェームズ・スチュアートの言葉がこちらに書いてあると言いましたが、もう１つ漢文が書かれてあったかと思います。何と書かれてあったかといいますと、こういう言葉です。「少にして学べば、すなわち壮にしてなすことあり。壮にして学べば、すなわち老いて衰えず。老いて学べば、すなわち死して朽ちず。」これは江戸時代の儒学者の佐藤一斎が述べた言葉で、これもよく生涯学習の中では聞かれる言葉です。人が一生学んでいくこと、先ほど稲富先生の中にいかに生きるか、それが重要だというお話が出てきましたけれども、そういうところに通じるのではないかなと思います。

大学だけが生涯学習の場を提供しているわけではございませんけれども、大学もまたこの言葉を実践したいと思っているような方々に対して、これからもさまざまな学習機会を提供していくことができたらいいなと思います。このあたりで、私の話を締めくくらせていただきたいと思います。駆け足でしたけれども、ご清聴どうもありがとうございました。

司会

それでは一部はこれで終了です。二部につきましてですが、大変恐縮ですが３時10分から再開させていただきたいと思います。終了時間は４時となっております。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

第二部　シンポジウム

知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み～生涯学習を通した社会貢献～

コーディネーター：清國祐二（香川大学生涯学習教育研究センター長）

それでは、後半のシンポジウムを始めます。今回のテーマは「知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み」といたしました。

高度情報社会の実現により、「知識」はさまざまなメディアを通して私たちの手元に届く時代です。私たち大学の認識がかつてと変わらなければ、社会から取り残されてしまうほど、社会における知の位置づけが変わってしまいました。象牙の塔に囲い込まれていた「知」から、大衆に溢れる「知」への変貌です。

そこで、このシンポジウムは、社会に存在する大学の意味をそれぞれの立場からご発言いただき、生涯学習を通した社会貢献について深めていこうと思います。ややもすると現象に翻弄されがちな現代社会に抗う意味でも、あるべき姿を論じることで、ここでの議論が生涯学習教育研究センターの今後の方向を示唆するものとなることを願っています。

そのために、本日はシンポジスト３名にご登壇いただいております。短時間のシンポジウムで大変恐縮ではございますが、小気味よい展開で議論が深まるよう、力不足ではございますが務めていきたいと思います。それでは、私に近い方から、順にご紹介いたします。

まず最初は、金沢大学地域連携推進センターの浅野秀重教授です。金沢大学は香川大学より一足早く「大学教育開放センター」が設置された、老舗の大学です。歴史や文化の薫り高き金沢の地で、地域に根ざした活動をされてきました。

次に、香川大学教育担当理事･副学長の阿部文雄理事です。開会の挨拶の中にもございましたが、現在、生涯学習教育研究センターの所属する教育・学生支援機構長として、学生教育のみならず、香川大学の社会貢献のあり方についても構想されています。

そのお隣が、先ほどご講演をいただきました、香川大学名誉教授の稲富健一郎先生です。会場のみなさまにはご紹介するまでもない、香川大学公開講座の代名詞的存在の先生です。

先生方、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

申し遅れましたが、私コーディネーターを担当いたします、香川大学生涯学習教育研究センター長の清國祐二と申します。会場のみなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、時間の関係もございますので、早速それぞれのお立場から、大学の地域貢献や生涯学習推進につきまして、現在感じておられます現状と課題についてご発言お願いいたします。

まずは、金沢大学の浅野先生、よろしくお願いします。

浅野秀重（金沢大学地域連携推進センター教授）

会場の皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました金沢大学地域連携推進センターの浅野です。

香川大学生涯学習教育研究センター30周年おめでとうございます。記念シンポジウムに参加をさせていただきありがたく思っています。本日お伺いする機会を得たことで、午前中、琴電にゆられながら栗林公園へ向かい、園内を散策させていただくことができました。手入れの行き届いた緑と公園そのものの美しさの中に身を置き、金沢の兼六園とは違う雰囲気の中でしばし時の経過を忘れ、ゆったりした気分を味わいました。

さて、さきほどの山本先生のプレゼンテーションでも金沢大学のことをお取り上げいただきましたが、香川大学さんとほぼ同じ時期に大学の教育と研究の成果を広く地域社会に開放するという役割を負って、私たちのセンターは1976（昭和51）年発足いたしました。開設公開講座数は、14講座、受講者は781人でしたが、センター発足時の記録によると、「大学教育開放センターは、日本の大学史におけるパイオニアとしての重大な役割を果たすために、市民とともに、着実な歩みを進めたい」と記されているように、大学と地域社会とを結ぶ機関としての歩みを始めたことになります。

ところで、金沢大学が推進している社会教育・生涯学習関連事業で最も特徴的なものは、金沢大学社会教育研究振興会という組織です。この組織は、県及び市町村並びに社会教育関連団体等、そして金沢大学とで構成する社会教育関係団体で、県及び市町の出捐（補助金又は負担金）を原資として事業展開するもので、私たちのセンターは、その事務局をあずかっています。この振興会の主たる事業は、お配りした資料の裏面、センターの主な事業の（２）で紹介しておりますが、金沢大学市町（村）共催講座というものです。これは、県や市町等が講座や学級を企画する際、助言を行ったり、その講座や学級に金沢大学の先生方が講師となって出向き市町村の公民館等で講義をしていただくというもので、この事業そのものは、昭和51年以来平成19年度末までに1,386講座開講し、59,584人の方に受講していただいています。市町村合併により開催する市町村数や開設講座数は減少しましたが、地域における学習機会の提供に大きく貢献しているものと受け止めています。

私は、学びの活動は、「昨日と違う今日の自分、今日と違う明日の自分づくりの営み」として捉えていますが、さきほどの稲富先生の「シェイクスピアとともに歩む」と題するお話をお聴きしながら、先生の講座は、単なる教養講座ではなく、知を私たち一人ひとりの現実の生活と結びつけながら、ヒトとしてどうあるべきかを考える機会となるようなことを意図して展開されているという印象を持ちました。そうした意図を持つ講座、学びの機会が、新しい自分つくり、自己発見につながるような気がいたしますし、そうした地道な取組が、言われるところの知識基盤社会づくり、人間力の形成にも寄与するのではないかと思います。このあたりで最初の発言といたします。

阿部文雄（香川大学教育・学生支援機構長）

私は先ほどの清國先生のご紹介にありましたように、生涯学習に関する専門家ではありませんので最初にお断りしておきたいと思います。香川大学として生涯学習なり社会貢献なりに、どういう戦略なり方向性を持っているかという観点から発言していきたいと思います。

先ほど申し上げましたようにこの社会貢献は、教育基本法の改正で２年ほど前に大学の第３の機能ということで明確に位置付けられました。大学は教育、研究、そして社会貢献を、あるいは地域貢献を目的にするということが明確にされました。そして本年の政府の方針として、生涯学習社会を目指すという方向が出て、いわば外的に大学の外から生涯学習なり社会貢献、地域貢献というものに力を入れていくんだという基本的な方向性が出されております。

香川大学は、それを受けてこの生涯学習なり、地域貢献を積極的に推進していくことに決めておりますけれども、今、申し上げました外的な要因に対して内的な要因というものもございます。

一例を挙げますと、平成11年に香川大学は初めてですけれども外部評価を行いました。大学全体を自己評価するということなんですね。その報告書を見ますと、４つの視点から大学を評価したいと言っております。１つは地域性、２番目が拠点性、そして学際性、国際性という４つの視点から自己評価をするというアプローチがなされました。

結論としては、今後、香川大学は個性化をしていく、国立大学の中で大学独自の香川大学ならではの個性化をしていく、これが求められているんですけども、その方向として４つの視点の中で最も有望なものは、拠点性と地域性ではないかということが結論付けられております。香川大学は10年ぐらい前に明確にそういう自覚をしながら、香川県における拠点、四国の中の拠点、それから四国なり、瀬戸内海なり、香川なり、こういった地域を大事にしていく、そういうことが有効ではないかと、大学として重要じゃないかということが明確になって、それ以降こういう方向性を基に、実は昨年４月に香川大学憲章というものを策定しました。そこでも知の拠点としての総合大学と言っています。

その地域貢献の中で生涯学習を位置付けて、積極的にやっていくんだと。その中で香川大学としての存在感というものを発揮していきたいというようなことを自覚しまして、今後とも地域貢献、生涯学習に力を入れていくという方向でやっていると思います。

大学は学びたいときにいつでもどこでも学べる体制が必要になる、これを国が保障する。その受け皿として香川の地では香川大学が、その拠点として正規学生以外のすべての方に、生涯学習の機会を与えたいということを積極的に推進していく、そういう方向性を持っておりますことをまず申し上げておきたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございます。先ほど稲富先生には、まとまった時間でお話しいただいたんですが、それに関わることにもなろうかと思います。四半世紀支えて下さった先生から、過去を振り返った上で未来の展望を一言いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

稲富健一郎（香川大学名誉教授）

どうも長いことしゃべり過ぎましたので、ここではあまりしゃべりたくないんですけれど。今、浅野先生から補足していただきましたように、知が知で終わらないで行動へと移行する、それが大切なんじゃないかなと思っています。知るということに関して、例えばクイズ的にいろいろなことをたくさん知るということも必要なのかもしれないけど、そうじゃなくて、一人一人の生き方に関わってくる、一人一人がそのこと（知）によって、より充実した人生が送れるようになると、そういう知の摂取の仕方というか、その知が行動に、あるいはその人の人格にまで影響するような、そういう体験ができる知であるのが望ましいのではないかと思っております。

それで、またロンドンの話になりますけれども、ロンドン大学でも、モーリー・コレッジもそうですが、あらゆる種類のアルコールが置いてありまして、いつでもそれを楽しめる。それは日本のキャンパスではだめなんですかね。ぜひそれを実現していただいて、あらゆる種類のアルコールが飲めて、お茶も飲めて、のんびりとお話ができるような雰囲気、環境を作っていただけたらありがたいかな。それには予算が要りますのでやっぱりお金が要りますね。

コーディネーター

ありがとうございました。幸い本日は阿部副学長がいらっしゃいますので、経営的な視点から後ほどご発言もいただけるものと思います。確かにイギリスなどは大学内にパブが複数あったりして、そこでアルコールを飲みながら会話を楽しむ習慣があることを思い出します。好きな人にはいいんですが、嫌いな人にはあまり喜ばれないかもしれませんね。

さて、先ほど阿部先生からお話をいただきました、大学として地域と関わり、貢献していくという視点ですね。大学がいくら頑張っても、地域が受け入れてくれないと意味がありません。その点、本日ご参加いただいている香川県教育委員会、高松市教育委員会、高松市市民政策部の方々をここから拝見するにつけ、まさに香川大学が香川県や高松市から大きな期待を受けていることを実感します。相互に歩調を合わせながら、県民や市民の幸福を実現させるべく、強調していることを再確認しているところです。

また香川大学の公開講座に毎年のようにご参加いただいて、それこそ変容というんですか、学びの中で皆様方がいつでも成長していただける。先ほどの行動や行為との合一というのがありましたが、社会をよくするために大学の知が活用される、それを支えてくださっている受講生の方々にも大いに感謝しております。

ですから私たちもそれに見合う努力といいますか、その期待に応えるべく、30年の節目に立ち、日々精進していかなければならないと思いを新たにしております。少し話を戻しますが、今回のテーマは知の循環型社会としていて、テーマ的には少し難しくはなっていますが、この地域と大学を結ぶ新たな展望というか展開というか、そういうものも大学の中では起こっています。そのあたりを阿部先生にお願いします。

阿部

先ほど香川大学は、生涯学習とか地域貢献に積極的に関わっていきたいという希望を申し上げましたけども、では具体的にどうするのかと、どういうコンテンツがあるのかということがまさに問題でございます。正規学生以外の社会人等に対してこれまで香川大学は、さまざまな教育プログラムを提供してきております。例えば公開講座といいますと、私は専門家ではありませんが、やはりこの稲富先生のシェイクスピアを見たらそれが面白い、あるいは大変聴きたいという、そういうところで皆さんが聴かれると思うんですけれども、もっと多様ないろいろな講義の組み合わせといいますか、単なる教室だけではなくて、フィールドワークも含めて、さまざまな多様なコンテンツで、教育プログラムを提供するということもあるんじゃないかなと思います。例えば徳島大学ではホノルルマラソンに参加しようというような公開講座で、実際にかなりの方が参加するとか、あるいはお遍路さんを一緒に体験しようというようなプログラムとかをやっております。

実は今、シニアカレッジというのをやっているんですけれども、今週の月曜日から明日の金曜日まで90分の講義が12回あって、月曜日の入学式の模様が瀬戸内海放送で少し放映されたそうなんですけれども、その後、少しまとまったものが来週放映されると聞いているので、ちょっと楽しみにしています。これは12の講義を香川大学の６つの学部のいろいろな先生たちを集めて４つのテーマで行います。讃岐うどん、お遍路さん、瀬戸内の島々、それから４番目として香川大学ならではの講義というふうに４つのテーマ性を持って、12の講義全体を聴いていただくというものです。初日からすごく盛り上がってきております。

参加していただいたのは、実は残念ながら県外の人ばかりで18人応募がありまして、北は北海道、それから福島、東京、神奈川、大阪、それから福岡からも参加されています。シニアカレッジですので50歳以上の方ですね。一番年長は69歳で、最も若い方が51歳なんですけれども、この方たちにどういうことでこういうプログラムに参加したのかということをお尋ねしますと知的な欲求があるということ。それから観光も楽しみにしている、グルメとか観光とかですね。それと、やはり３番目は交流なんですね。いろいろな方がそのことについて自覚しておりますので、もう初日からすごく打ち解けて、どんどん交流しています。

最初のウェルカムパーティーのときに、同窓会をやろうということが大きな話題になるような形でやっています。いろいろな地域から来た方々が、この香川というところで交流をするわけです。それは集まった方同士もありますし、香川の私たち教職員とかいろいろな方々との交流、そういうことを楽しみに参加しているということが分かりました。これは私は個人的には非常に有望じゃないかと思っておりまして、いろいろなパッケージで教育プログラムを提供するということですよね。

ただ残念ながら今のところ大学としては赤字でして、来年以降続けられるかどうか分からないんです。もう少し参加者が多くないときついかなと思っているところでございます。こういうまったく試行錯誤で始めていることなんですけれども、いろいろな形の教育プログラムを提供して、それにあらゆるところから参加していただくという展開も、生涯学習としてはあるんじゃないかなと思っております。それからちょっと長くなって恐縮ですが、いろいろな試みの一つとして、四国の国立大学が５つあるんですけれども、連携して何かいろいろなことをしませんかということが、今、起こっております。

香川大学が主幹大学になって大学間連携ということで、手法としてはｅラーニングというものを使って、四国学という内容で70科目ぐらい提供します。７つの大学が参加しているんですけども、それぞれ10個ずつ面白い講義を出して、それをｅラーニングで見られるというふうにするわけです。これは主として正規学生に対して単位を与えるという形で、四国の面白さをコンテンツにした大学間連携をやろうというようなこともしております。

香川大学では、独自に讃岐学というものをいろいろな講師の方に協力していただいて、一つの固まった２単位物として作ろうとしています。地域を素材にしたり、地域の人や歴史や文化やさまざまなものをコンテンツにした新しい教育プログラムとか、新しい教育手法なんかを展開していきたいと。できれば香川県に在住の多くの社会人の皆さんが、興味を持って参加していただくことができたらなというふうに、具体的な一例としてはそういうものを考えております。

コーディネーター

ありがとうございます。まず第１点目はシニアカレッジの例からもその交流が大切だということです。ぜひパブもご検討いただきたいということと、香川大学も新しい取り組みを今年だけでもたくさん実施しています。全国的な流れでもありますので、金沢大学でも同様の取り組みをされているように思いますので、今後の方向性も含めて浅野先生からお願いします。

浅野

お配りした資料をまたご覧ください。香川大学さんと同様に発足した金沢大学大学教育開放センターは、４月から社会貢献室と組織統合して、センター名が地域連携推進センターとなりました。

金沢大学は、これまでは８学部体制であったのですけれども、この４月から３学域16学類というように再編成されました。教育学部は学校教育学類に、法学部は法学類にという形です。それと同様に我がセンターも改めて、人と人、人と地域、地域と地域を結ぶ、そういうような役割を果たしたいという願いを込めた地域連携推進センターとして新たなスタートを開始しました。資料の冒頭に、金沢大学憲章を一部掲げましたが、金沢大学は21世紀を切り拓き、世界の平和と人類の持続的な発展に資するとの認識に立って、自らを「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」として位置づけ、地域連携推進センターは、大学の持っている人的･物的資源を生かすこと、地域社会と連携しながら地域再生に積極的に参画すること、これらの活動を通じて大学自体の教育研究の活性化に寄与することを目的としています。

具体的な事業としては、資料の裏面をご覧ください。先ほどふれた、金沢大学社会教育研究振興会ですが、現在、どこの自治体も、もちろん社会教育・生涯学習振興行政の部局も事業予算は厳しく、スクラップせざるをえない事業も場合によっては出てきます。そうした事業を見直し、新たな形態や方法でさらに発展させる意図で県や県生涯学習センター、そして私たちのセンターが協力・協働し合って取り組んでいる事業として、（２）の市町村共催講座の他に（４）の生涯学習・社会教育等担当者研修、そして（５）の生涯学習振興県民フォーラムがあります。残念ながら県がスクラップあるいは縮小せざるをえなくなってしまった事業を、補助金を受けている団体が新たな取り組みをすることで県や市などの自治体に成果を少しでも還元できるように、知の循環という言葉がありますが、いわば財源の循環と言いうるような形で推進しています。市や町の講座や事業に金沢大学の先生方が関わることによって金沢大学と地域がさらにつながり合うことができるよう努めたいところです。

そういう点におきましても、24年間シェイクスピアの講座を引き受けてくださっている稲富先生のような方は、貴重な存在です。清國先生から本日講演していただいた先生のことを事前にお聞きしていたものですから、稲富先生とのごあいさつで開ロー番、「先生は香川大学の公開講座の象徴的存在のようですね」と申し上げてしまった次第です。そういう先生は公開講座を企画したりする者にはありがたい存在なのです。

私たちが、学内の先生方に市民の皆様の前でお話ししていただく機会として企画しているのが、資料裏面（７）のサテライト・プラザにおけるミニ講演です。これはおおむね毎月第３土曜日、２時から３時半まで、ホットな情報や話題をわかりやすく語っていただくというものです。それを契機に、翌年度に公開講座を開設してくださる先生もいらっしゃいます。また、公開講座は多くの場合、キャンパスのある金沢市内で行っていますので、金沢になかなか来られない方に対する学習機会を提供するために、（８）の事業、これは仮称なのですが学習コンテンツづくりを進め、e-learningによる公開講座、公開 e-講座的なものを今年度から徐々に試行していく予定です。

先ほど清國先生がお話しされたこのレジュメの最終ページの「知の循環型社会」のイメージ図ですが、「生活知」の下に、「情報」とあります。この情報というのを私自身は、情けの知らせというように理解しています。講座などで、講師の先生方から聞いたことで、「そうだったのか」と納得する。いい情報を知らせてもらったという意味で、私は情報というのは情けの知らせである必要があると思うのです。もちろん悲しい知らせというのも場合によってはありますけれども、本来的に情報は、知らせてくれてよかった、知ってよかった、ありがたい、力になるなというようなものなのかなという気がしています。そうした情報が、清國先生のおっしゃる科学知、専門知へとなったり、生活知となったりすると言ってよいのでしょう。科学知、専門知と生活知の循環交流によって生み出される知、それが、清國先生の「融合知」であったり「納得知」なのではないでしょうか。

こうした知を、大学と地域の方々が手を携えながら地域づくりやまちづくりに生かしていくというような意識的な取組が、地域の活性化に寄与し、ひととひと、ひとと地域、地域と地域をつなぐ、結ぶ効果、成果をもたらすことになるのではないか、と思います。

コーディネーター

そうですね。まさに今ご指摘いただいたのが循環ということだと思います。私たちはめぐりながら、より安定したところに着地するというんですか、そのように思いました。

それではこれまでの時間、皆様方にはフロアでお聴きいただいて、何かお感じになったこと、ご質問や

ご意見等がおありではないでしょうか。また香川大学へということで、限定せず皆様のご要望なども含めてご発言いただければと思っています。いかがでございましょうか。挙手をしていただければマイクを持ってまいりますので、よろしくお願いいたします。

質問者Ａ

座ったまま失礼いたします。先ほどの阿部先生のお話ですけれども、シニアカレッジの申し込みが香川県民から誰もいなかったと伺いました。大変残念に思うし、恥ずかしいと思うんですね。それはさておいて、どういう事情で、どのような周知のされ方をなさったかというのが一つ目の質問です。それからもう一つ、日本は高齢化社会に突入しております。60歳を過ぎた人を対象に生きがいを求めるための事業として、いろいろな形があると思います。今は定年が65歳ぐらいまで延長されつつあるようですけれども、男でも80歳近くまで平均寿命が延びていますので、どのようにして生きがいを求めながら死ぬまで過ごすのかというのは社会の課題ですよね。そこで、講座の具体的な中身をお考えいただけたらありがたく思います。

コーディネーター

どうもありがとうございました。それではご指名ですので阿部先生、お願いします。

阿部

ありがとうございました。周知の方法は確かに問題がありまして反省材料なんですけれども、シニアカレッジはもともとJTBの方から話がありました。３年ほど前だったんですけども、私が経済学部長をやっていたときに、ツーリズムコースを作ろうとしていたときに、たまたまその関係でシニアカレッジをやりませんかという話があって、それに乗って、やっと３年目に実現したというものです。

昨年も実施をしたんですけれども、参加者が少なくて中止になったということで、今回、今年は３回目でやっと実現にこぎ着けました。もともと滞在型の生涯学習ということで、ターゲットは県外の方に地域に来ていただきたいということを主眼にしていました。地元の方ももちろん歓迎ですけれども、そういうところに力点があって、１週間滞在して地域の店とかいろいろな人々と交流する中で、香川県とか四国のよさを感じ取ってもらいたいという趣旨だったもので、地元での周知が遅れました。

このシニアカレッジは50歳以上であればどなたでもということなんですけども、60歳以上の方により魅力的な内容のものをということで、研究していきたいと思いますが、そういうふさわしい内容ということであれば、専門家の清國先生とか浅野先生にお願いしたいと思います。

コーディネーター

いろいろ考えがあると思うんですが、例えば広島大学などはフェニックス入学といって60歳以上の方々が、学士課程でも修士課程でも博士課程でも入れるというような取り組みもしてございます。受験生や入学者が確保できるかという問題もございますが、いろいろな形でさらに専門を深めたい気持ちは人間の自然な感情です。おそらく企業戦士として働いてこられた方々が、もう一度わが人生を振り返りながら、さらに学術的なものとも触れる機会を提供することはとても大切なことだと思います。

先ほどｅラーニングの話題が出てきましたが、授業を公開するというような形も香川県の教育委員会と連携しながらやってございます。そういうものの周知の方法が多少足りないかなという反省をしておりま

す。今後はどしどしお知らせしながら、より多くの選択機会を提供するように頑張っていこうと思います。どうもありがとうございました。他にいかがでしょうか、後お一方ぐらいはお時間が取れそうです。はい、どうぞ。

質問者Ｂ

先生方のお話を聞いた中で、私がちょっと思ったことなんです。ちょっと質問の仕方が趣旨に添うかどうかがわかりませんが、構いませんか。

コーディネーター

どうぞおっしゃってください。

質問者Ｂ

お話を聞いている中で思い出したのは、今、日本の国が世界の中で地盤沈下しているじゃないかということです。言い方を換えれば日本が軽んじられているじゃないかと。その状況を生涯学習によって立て直しができないでしょうか。世界の中で日本がどうあるべきか、というようなことを、しっかりやっていかないと日本の生将来が暗いのではないかと思います。それが公開講座でできないでしょうか、と思ったわけです。

コーディネーター

ありがとうございます。国際社会の中でもっと日本の地位を高めるために大学がより大きな役割を果たすべきではないか、という意味でしょうか。公開講座を越える内容になりますが、稲富先生いかがでしょうか。いきなり振って申し訳ありませんが。先生のお立場からすると、日本人の見識を高めるために公開講座がどのように役立つのか、展望が開けるのか、先生の個人的なお考えでも結構ですのでお願いします。

稲富

それは、外国人が持っている日本観、日本人観というものが実体にそぐわないのでもうちょっと評価をしてもらいたいという意味なのでしょうか。はっきりご質問の意味が分かりかねるのです。それとも我々自身劣等感を持たないで、もうちょっと胸を張って生きるようなそういう生き方をしようとするのか、どちらなんでしょうかね、ご質問の意味は。

質問者Ｂ

それは、私たちが日本を立て直すというような考え方をもって生きることが重要であって、このような勉強ができないか、と思うのです。自然にまかせるのではなくて、意識的に盛り上げていくと。

稲富

シェイクスピアの講座の中で、あらゆることに客観的に正しい判断力を持てるように努力しておりますが。なるべく我々のいいところはいい、悪いところは悪いという判断を持つということが大事なわけで、それはシェイクスピアに学んで、我々の講座ではそれをやっているつもりでおりますけれども、なかなか

難しいことだと思います。

質問者Ｂ

根底には日本の未来を明るくするというのが私の願いですので、そのような観点から申し上げました。ありがとうございました。

コーディネーター

どうもありがとうございます。公開講座にも参加していただいておりますので、ぜひともシェイクスピアの講座をご受講いただいて、その中で疑問を解消していただければと思います。それではお時間も迫ってまいりました。もう一言ずつのお願いになるんですが、ご登壇いただいた３名の先生方に、私どもの生涯学習教育研究センターに対しまして、エールのような形で一言ずつご発言をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

浅野

大学で仕事をする一人としましては、地域と学ぶ、地域から学ぶ、学びを地域へという姿勢で地域の皆さんと関わっていきたい。そのことによって知縁コミュニティを創っていきたい。知縁の知はもちろん知識の知でございますが、そういうような役割を果たしたいと思っています。北陸と四国ではありますけども、香川大学生涯学習教育研究センターさんと、またいろいろな情報交換をしながら頑張っていきたいと思っております。

もう一言だけ言わせてください。これは私の言葉ではなく、かつて朝日新聞の読者欄に掲載されていたものです。だれでも齢を重ねますが、老化という文字は老いて化けると書きます。でも化という字にくさかんむりを付けると老いて花を咲かせることになると。

老いて花を咲かせるためには４つのものが必要だそうです。一つは老健、老いてなお健康、元気であるということ、２つ目は老性、これは感動、美しいものに感動するという感性と言っても良いかも知れません。三つ目が老働、老いて働くというよりはむしろ、知を地域や次代に伝える、知を継承していくこと、それがご高齢の方の役割ではないか、使命だという思いで貢献していくこと。そしてもう一つは老勉です。学び、いつまでも学び続けるという熱い思いです。この四つのことをある会場で紹介しましたら、独りぼっちじゃなかなかやりにくいから、老いてなおかつ友達や仲間がいた方がいいのではないか、という感想が寄せられ、その友は友でも単なる友人の友じゃなくて朋友の朋的な老朋。これで老いて花を咲かせられるのではないか、ということでした。もう一遍繰り返しますと、老健、老性、老働、老勉、そして老朋と、これで高齢化社会を乗り切っていきませんか。本日はお招きいただき感謝します。ありがとうございました。

コーディネーター

では、阿部先生、お願いします。

阿部

私が最後に申し上げたいことを一つだけ挙げるとすれば、香川大学には600人を超える先生方がいます。私も先ほどのシニアカレッジで３つ半授業を聴きました。出張等で全部聴けていないんですけれども、医

学部、教育学部、工学部、農学部の先生の話を初めて聴かせてもらったんですけども、本当にびっくりするほど内容の濃さに驚きました。授業も大変うまくて、この600人を超える知の蓄積をぜひ地元の皆さん方にいろいろな形で提供したいと思います。それは清國先生たちの生涯学習とも連携しながらですけれどもしたいと思います。そして、先ほどの質問に私なりに答えるならば、今、日本の社会は地方分権を必要としております。地方が元気になっていくことが日本全体の活力を増していくということで、やはり地域の人が元気で学ぶ姿勢を持つ、見識を持つ、地域を大事に考えるということだと思います。優秀な人材を育てるということにみんなが一致協力してやれば地方が元気になるし、日本を立て直すことになるというふうに私は考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

稲富

生涯学習にエールを送れということですけれども。以下の３点で現在の講座を楽しませていただいております。資格・学位取得とは無関係で試験がないというのでいいですね。それから気が向かなくなったらいつでも去れるという、これもいいですね。それから受講中に熟睡できること、これも良い。マクベスが王様を殺したときに「マクベスは睡眠を殺した」という有名な台詞を語ります。それから彼は眠れなくなって気が狂ってしまうわけです。いいことだと思っております。

私のハンドアウトを見ていただいたらと思います。最後のページ、３ページですけれども、ここでエールらしきものを送っております。道化フェステの詩のパロディーとして３ページの下に、これはエールになるかどうかちょっと心配ですが、書いています。「生涯学習とは何だろう、未来にあるのではなく、今の喜び、今の笑いが。未来に何が起こるか分からない、ぐずぐずしていいことはない。さあ、すぐ始めよう生涯学習。人生は長く続かないのだから。」あまりエールになっていないと思いますが。

一つだけ最後に、コンビニでも今どういう商品が売れるか、どういう商品がみんなに求められているかって絶えず研究しているらしいですね。押し付けにならないで、循環型になるためには、一般の社会の方々がどういうものを求めておられるか、それをいつも敏感に察知する必要があるのではないかと思うんですね、循環型の知を確立するためには。以上です。ありがとうございました。

コーディネーター

シンポジストの皆様方、どうもありがとうございました。またご聴講いただきました皆様方には重ねてお礼を申し上げます。変化の激しい社会で、その中で価値自体も浮遊しているわけですが、だからこそ大学が足元を固めて価値を創り出していかなければならないと思っております。

当センターも30年経過いたしました。皆様方には今後も当センターをしっかりご支援いただきつつ、さらに私たちもより身近に感じていただけるセンターになるように努力していきたいと思います。本日のこの講演会とシンポジウムにご参加いただきまして、大変ありがとうございました。閉会のご挨拶も兼ねて本日の全日程をこれにて終了させていただきます。皆様どうぞお気を付けてお帰りくださいませ。